

問い5 お浄土とは何ですか。

連研中央講師・新潟教区  
井上 慶永

「お浄土とは何ですか」。そう問われて、皆さんは何を思いますか？「その答えはお経に示されているんでしょ？」とか「それはお坊さんが教えてくれることじゃないの？」と思われるかもしれませんが、確かに「お浄土」は日常生活で頻繁に使う表現ではないし、お通夜やご法事でお坊さんの話に出てくるくらいしか聞いたことがないという方も多いと思います。でも「連研」で皆さんに「お浄土とは何ですか」と問いかけるには、それなりの意味があるのです。ですから「それを考えるのはお坊さんの役目」などと思わず、一緒に考えてみましょう。

まず考えてみたいのは「お浄土と聞いて何を連想するか」ということです。よく聞かれるのは「お花畑のような所」「ご先祖さまのいる所」「お仏壇みたいな所」などです。法話をよく聞かれる方の中には「阿弥陀経に説かれている世界」とか「阿弥陀如来が建てられた世界」と言う方もおられます。確かに、お経にはお浄土の様子が説かれていますし、阿弥陀さまが建立された世界とも示されています。さらに言えば「ご先祖さまのいる所」「お花畑」「お仏壇」というイメージも、元を辿ればお経に説かれたお浄土の様子に行き着きます。つまり「お浄土とは何ですか」と問われたとき、お浄土のイメージを答えればあながち間違いではないということです。でも、そのイメージでは、お浄土のことを考えるときの大切なポイントが抜けてしまいがちです。それは「私」ということです。よく聞かれるイメージだと「お浄土」は今を生きる「私」とは無関係な存在として位置づけられています。お浄土と私に関係しているなんて意外かもしれませんが、本来お経にはその関係が説かれていますし、親鸞聖人もきちんと示されています。

では、皆さんにとって「お浄土」と「私」がなかなか結びつかないのはなぜでしょう？その原因は、皆さんの側にあるのではなく本願寺教団や僧侶の側にありました。

宗教には、「宗＝よりどころ」の「教え」という意味があります。親鸞聖人にとっては浄土真宗の教えが人生のよりどころでした。浄土真宗は、私たちが阿弥陀さまの願いに出会い、お浄土のはたらきに導かれ、このいのち終わったときにお浄土に生まれて仏さまにさせていただくという教えです。しかし、時代を重ね教団を通して教えを受け継ぐうちに、伝わり方が変わっていきました。現世は世間の掟や権力者の命令に従うことが大切で、亡くなった後の来世に阿弥陀さまに救われて、お浄土で仏さまにさせていただくことを喜ぼうという形になってし

まったのです。このいのち終わったときにお浄土に生まれるということが強調されて伝わったことにより、「お浄土は死後の世界だから、生きている私には関係ない話」と受け止められるようになっていきました。その結果、大切なポイントである「お浄土のはたらきが今の私に届いている」ということが抜け落ちてしまったのです。それは、皆さんの聞き方が悪かったのではありません。現実社会の課題や生活の中に現れる苦悩にきちんと向き合わず、阿弥陀さまの救いを来世に留めてしまった教団や僧侶の責任です。大変申し訳ないことです。だから、皆さんとともにきちんと「お浄土」に向き合うため、「連研」のテーマに取り上げさせてもらったのです。

「お浄土のはたらきが今の私に届いている」とはどういうことか。改めて今回のテーマで確認したいと思います。「お浄土とは何ですか」という問いに「私」を付けてみてください。「私にとってお浄土とは？」と問われたらどうでしょう？

考えやすくするために、お浄土を「場所」と限定せずに「世界」ととらえてみましょう。英語で「家」を表す単語に「ハウス」と「ホーム」があります。ハウスは「一戸建ての家」という建物・場所を表しますが、ホームは「我が家」という意味で一戸建てであろうがアパートであろうが、自分が安心して居ることのできる空間・世界を表します。お浄土も「お花畑のような所」「ご先祖さまのいる所」と考えるのではなく、「お花畑のような世界」「ご先祖さまの世界」ととらえてみるのです。そうすると、私と無関係ではなくなり、お浄土という存在が私に届けてくれるはたらきを感じることができるかもしれません。

考えるヒントはたくさんあります。「お花畑みたいな世界」ということは、色とりどりの世界ということにもなります。十人十色と言うように、誰もがもっている個性をすべて受け入れてくれる世界とイメージしてはどうでしょうか。そこには、異なる価値観や考えの違う人をなかなか認められない私たちへのメッセージが込められているのではないのでしょうか。お浄土が「ご先祖さまの世界」ということは、先立たれた大切な人が阿弥陀さまとご一緒に私を見守ってくれている世界ということにもなります。「お仏壇みたい」ということは、蠟燭の灯のように阿弥陀さまの光で輝く世界＝お浄土は私の方を向いているというように受け止めることもできるでしょう。

親鸞聖人は、お浄土を「ご本願がそのまま成就した世界」と示されます。浄土真宗という宗名は、すべてのいのちを決して見捨てないと誓われた阿弥陀さまの願い（ご本願）が完成した世界（お浄土）から私に届けられるはたらき（真実）

をよりどころ（宗）としますという意味です。

私にとってお浄土とは何なのか。一緒に考えていきましょう。

問い5 お浄土とは何ですか。

連研中央講師・兵庫教区  
棚原 正智

今回のテーマは「お浄土とは何ですか」という問いです。

「お浄土とは私の立脚点であり、私を含めたこの世を見通す視座をしめすものです。人間の知恵を超えた仏さまの智慧の世界である浄土の一端を知ることにより、人間の世界のさまざまな様子を見据えることができるのだと思います」というのが、私自身の問いに対する回答です。

しかし、この回答はいかにも真宗的な百点満点な答えで、なかなかそうは思えないというのも、そのとおりです。

では、各々の立脚点や、頼るものは何でしょうか。

日暮らしをしていますと、思いもよらない出来事や思い通りにならない出来事で、生活が乱れることがあります。

なんとか自分で乗り越えようとするのですが、自分の許容範囲を大きく超えてしまうと生活が乱れるどころか、人生そのものが混迷してしまうと、ただただ立ちすくんでしまいます。

思い通りにならないことの原因は、自分自身であったり、自分の周りとの人間関係であったり、経済問題や、その時どきの社会情勢や災害であったり、今回のコロナ禍のような人類史的な出来事であったりと、多岐多様にわたります。

そんなとき、私はどうするでしょう。

まず、自分に「しっかりしろ！がんばれ！」と声をかけて奮起を促し、なんとかしようとして解決の道を模索します。

自分に奮起を促しがんばったことで、問題が解決すれば、めでたしめでたしですが、長い人生の歩みは、そうそううまくいくことばかりではありません。

そんなとき、私たちは知らず知らずのうちに、何か頼れるものはないかと、頼れるものを探し始めます。まさに「溺れる者は藁をも掴む」です。ほんの少し冷静であれば、今、私が掴んでいるものは藁なんだとか、比較的頼りになるものなんだというような、判断が出来るのでしようが、なにしろ溺れている状態ですので、何を掴んでいるのか判らない。沈んでしまう危うさがあります。

この度は、浄土真宗をおこされた親鸞聖人の生涯の一端を通して、親鸞聖人の立脚点や頼りとされたものを考えたいと思います。

浄土真宗をおこされた親鸞聖人の生涯も、波瀾に満ちた生涯でありました。

法然聖人の元におられた時、朝廷から、念仏を称えることを禁止されてしまいます（承元の法難）。この時に、法然聖人の元で、親鸞聖人とともに過ごしていた住蓮房と安楽房は死罪となり、法然聖人も親鸞聖人も流罪となってしまいます。これなどは、当時の念仏集団においても親鸞聖人にとって最大の事件でありましょう。

親鸞聖人は、生まれ育った京都を離れ、越後に流されました。見知った人も見なれた風景もない土地です。きっと何かしらの孤独感を味わわれたことでしょう。

そんな時、親鸞聖人は何を頼りとされたのでしょうか。

親鸞聖人のお言葉に「慶（よろこ）ばしいかな、心を弘誓（ぐぜい）の仏地（ぶつじ）に樹（た）て、念（おもい）を難思（なんじ）の法海（ほうかい）に流す」（『註釈版聖典』p473）というお言葉があります。

この言葉は親鸞聖人の主著であり、浄土真宗の立教開宗の書である「教行信証」の最後のほうに出てくる言葉です。また、この言葉の少し後に「ただ仏恩の深きことを念うて、人倫の嘲りを恥ぢず」と出てまいります。

京の都ではお念仏を思うように称えられず、生まれ育った地から、遠くの地へ赴くことになっても、私の心は仏地という阿弥陀さまのお浄土に根を張り樹っている。たとえ人々に嘲られようとも、私は恥ぢずかしいとは思わない。という親鸞聖人の力強いお言葉です。

親鸞聖人においては、お浄土や阿弥陀さまのみ教えは、頼りにするものであり、自身を含めたこの世を見通す視座をしめすものだったのでしょう。

親鸞聖人にとって浄土とは、将来的に浄土に生まれてかりそめの楽を得る現実逃避の場所ではなく、浄土という世界から、娑婆とも穢土ともいわれるこの世界の相（すがた）を見据えるための存在であったのです。

親鸞聖人の時代に限らず、現代社会も、何が起こるか分かりません。2020年は東京でオリンピック・パラリンピックが開かれ、全世界から多くの人々が日本を訪れることだろうと、誰もが思っていました。コロナ禍で、全世界的に往来が制限されるなどと思った人は、一人もいないでしょう。

最近ではソーシャル・ディスタンスという言葉をよく見聞きします。「社会的距離の確保」とか「人的接触距離の確保」ということのようにです。人は一人で生まれ一人で死んでいく存在ですが、生きている間は一人では過ごせません。支え合いながら生きていくのが人でありましょう。しかしながら、ソーシャル・ディスタンスと言われる前から、周りに人がいても、ふとひとりぼっちの感覚に襲われたり、孤独にさいなまれたりすることはあります。

まわりに人がいても、ひとりぼっちと感じ暗闇に閉じこめられたような気持ちになったことはないでしょうか。そんな時、あなたは何を頼りに歩みを進めましたか。また、今後何を頼りに歩みを進めようと思われませんか。